

中大生の旅するチカラ

7

◇東日本大震災からの復興に◇

人生観を変えた東日本大震災

あるとき、あなたは

あるとき、あなたは何処で何をしていただろうか。2011年3月11日に発生した東日本大震災。この震災で私は、岩手県釜石市に暮らす104歳の祖父と、叔父叔母を失った。市から指定された津波避難所のなかで、避難用の貴重品袋を携えたままの死であった。

今回の震災で被災された皆様へ、心からお見舞いを申し上げます。

被災者の方々や、私のような遺族だけでない。日本全体が深い悲しみの淵に立たされた瞬間だった。あの日をさかいに多くの人が価値観を、そして人生観をも変えたのではなからうか。家族との絆、仲間の大切さ、そして生きることの尊さ、は

かなさ、無常を感じた人もいただろう。

今、私たちは時代の変曲点に立たされている。明日の日本の復興に、若いチカラが必要などときだ。どんな小さなことでもよい、できることから始めなくてはならない。

激動の日本を生き抜いた

104歳のアスリート

私の祖父・下川原孝は、生前、「超老人アスリート」としてテレビや新聞などマスコミに数多く登場していた。98歳から始めたマスターズ陸上では、投てき三種目（砲丸投げ、やり投げ、円盤投げ）100歳以上の部で世界記録を



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBIに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。All About旅行チャンネル案内役。日本旅行作家協会、日本観光研究会等所属。著書に「JTB旅をみがく現場力」（東洋経済新報社）など。近著に「観光ビジネスの新潮流」（学芸出版社）がある。



104歳のアスリートとしてマスコミを賑わせた生前の祖父・下川原孝選手（2010年9月東京・国立競技場で開催されたマスターズ陸上選手権大会で）

樹立して、なおも毎年、記録更新に挑み続けている。幾つになってもチャレンジする姿が共感を呼び、日々の暮らしふりや筋力トレーニングの様子、そして酒をこよなく愛する姿までもが映像でお茶の間へと届けられたから、ご記憶の方もいるであ

ろう。3年前には内閣府から「エイジレス・ライフ実践者」の称号も与えられたほど、屈強な体力の持ち主であった。

家督の厳しい明治の時代、陸前高田の農家に次男として生まれた祖父は、身体能力に恵まれたことから東京の日本体育大学へと進み、地元へ戻って県立高校の保健体育の教職に就いた。その陸前高田も、かつての風景は見る影もなく壊滅的な被害を受けた。

軍人として、戦地へ赴いたこともある。帰還してのち、新設校の配属に伴い釜石に移り住んだのは、今からちょうど70年前。第二次世界大戦が開戦する前の年のことだった。

日本の近代製鉄発祥の地・釜石は、「鉄のまち」とも呼ばれる。戦時中は軍需で栄え、日本の本土では初となる米軍の艦砲射撃にも狙われた。戦後は日本の高度経済成長を支えた。子どもながらに記憶する昭和の時代の釜石は、とびきり輝いていた。アーケード街が広がりデパートには物が溢れ、祖父が夜な夜な通った「呑ん兵衛横丁」も労働者たちで活気づいていた。新日鐵が高炉を停止したのは平成元年のことである。そこから釜石は、静かにときを刻んでいた。

激動の日本百年史において祖父は、さまざまな難をかわして生き延びた。子孫繁栄、晩年はマスコミに囲まれる毎日で、幸せな長寿を迎えていた。だが、この104歳のアスリートも、巨大津波という自然の脅威には敵わなかったのである。

捜索に被災地臨時便を 遺体安置所で無念の対面

東北沿岸部の被災地へ私が初めて入ったのは、震災後10日目のお彼岸の朝のことである。普段は定期便が就航しない羽田・花巻線だが、日本航空が被災地向け臨時便を飛ばし始めたことニュースで知った。そこで従弟と二人、空席待ちをかけたの旅立ちだった。

祖父ばかりか両親もいっぺんに亡くした従弟の



地元避難所や全国各地から80人以上の参列者が桜散る被災地・釜石の石應禅寺を弔問。告別式で最期の別れを惜しんだ

下川原稷は、港町・釜石で生まれ育った海の男で、学生時代は中央大学ヨット部に在籍した。今は妻子とともに千葉県船橋市に暮らしている。震災直後に東北自動車道は閉鎖され、東北新幹線や在来線は寸断、さらに仙台空港は水没し、電話は不通が続く。遠隔地からの安否確認は難を極めた。

そうしたなか、すでに私の父たちは新潟・山形經由の日本海ルートで被災地入りをしていた。東京ですらガソリンの補給にこと欠いていたときだ。自家用車にガソリントタンクを搭載して、ときには補給の列に並びながら釜石を目指していた。父たちは生存を信じて避難所を回り、目撃情報を収集して歩いていた。

そこに飛び込んできたのが、ゲートルのパーソンファインダー（消息情報）である。パソコンの前で、私が臨時便の予約手配をしている最中のことだった。祖父の遺体発見第一報が、知人を介して寄せられたのである。

いわて花巻空港で父らと合流して、私たちは廃校に設けられた遺体安置所へと直行した。外は小雪が舞っている。うすら寒い体育館の床には、おびただしい数の白い遺体袋が並べられていた。身元の確認が済んだ遺体は棺に納められるが、遺体袋は身元がわからないことを意味していた。叔母がまだ遺体袋のままだった。寒かったでしょうに……と、心で呟くも、線香を焚く台もない。故人の無念さが伝わるかのような、辛くて寂しい対面であった。

中央大学ヨット部の勇者たち 心からありがとう

被災地の凄惨さは、画像や映像では伝わらない。なぜならへドロ口の匂いが、あまりにも強烈だからだ。いたるところに体長1メートル近い魚が、ハラワタを出して打ち上げられている。ゴム手袋などをひと通り用意して行ったものの、寒さのなかでの強い異臭に、やるせなさが募った。

祖父ら三人が暮らした釜石の家宅は、2階の窓枠を超えての浸水に、誰の車か茶の間を貫通し、トロフィーも位牌も、すべての家財がへドロまみれだった。玄関の扉は流され、自警のしようもない。しかし被災地はガソリン補給の場がなく、泊まる場所もないから長居もできず、私たちを悩ませた。集中的に人手が必要だったのである。そこに救いの手を差し伸べてくれたのが、中央



告別式が営まれたお寺の本堂に供えられた献花には中央大学ヨット部OB会の文字が



大学ヨット部の勇者たちだった。

岩手県山田町に実家があるという現役主将の山崎くんが、自らの親族も被災したというのに仲間らと災害支援隊を結成して、葉山の合宿所から駆けつけてくれたというではないか。さらには物資を運んで炊き出しまで行ったと知って、涙が溢れた。

大量の海水を吸って重さが増した2階の畳を部員らが取り除き、洗えば使える品々を丁寧の外へと運び出してくれたのは、のちに葬儀で釜石を再訪したときに見て知った。食器は大小、絵柄を揃えて整然と積まれ、未開封の酒、それも祖父が好んだ釜石の地酒「浜千鳥」もバケツをクーラーボックスにきちんとストックされていて、本当に驚いた。

中大ヨット部の災害支援隊ががれきの撤去や潮をかぶった家財の片づけを行ってくれた岩手県釜石にある下川原の家宅

この場を借りて中央大学ヨット部OB会の皆様、そして小野監督、現役学生の皆さんに心から御礼を申し上げます。

震災から四十九日にあたる日は、ちょうどゴールデンウィーク前半に重なった。震災当日から本堂が避難所になっていた菩提寺は、落ち着きを取り戻し、葬儀の準備が進められていた。告別式と法要には、三人の最

期の別れにと多くの方がご列席くださった。読経が始まる直前、親族席に向かうと、ひときわ大きなスタンド花に「中央大学ヨット部OB会会長・河原正範」と綴られている。津波で命を落とした故人らも、海の勇者たちに手厚い弔いをほどこしてもらい、さぞ永遠の旅路が心強かったに違いない。山門には、例年になく遅咲きだった桜が、まるで見送るかのごとく美しい散り際にあつた。

明日の日本の復興を信じて、今、自分ができることを震災からの日々、私たちは実践してきた。心を寄せた人、義援金や支援物資で協力した人、そして被災地でボランティアをした人と、表し方はさまざま。そしてこれからも、小さなできることを積み重ねていかなければならない。「私たちには、できる」。そんな確信を抱いている。